

マナウス現地校の特色ある教育から再考する、日本人学校の教育活動の在り方

前マナウス日本人学校教諭

岐阜県揖斐郡大野町立揖東中学校教諭 横山 大祐

キーワード：外国語教育、国際理解教育、総合的な学習の時間、カリキュラム・マネジメント、学校設備

1. はじめに

海外で日本人学校を有効かつ円滑に運営するためには、現地の文化や社会性を考慮して教育計画を練ったり、日本とは異なる点について配慮をしたりすることが必要である。そこで、複数のマナウス現地校を視察し、その特色を捉えることで、日本人学校のよりよい教育活動につながるヒントはないか検討した。

2. 視察した現地校とその特色

(1) 州立ジジャウマ・バチスタ・ダ・クーニャ校（訪問日：平成29年10月2日）

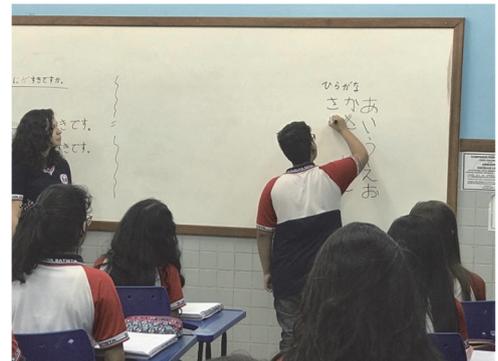
① 基本情報

児童生徒数…約980名（6年生～9年生） 教員…48名 授業時間…午前7時～午後5時
授業料…無料 選抜条件…学校から2km以内に住んでいる生徒を成績順に選抜

② 学校の特色

ア バイリンガル教育

ブラジルの公立校として初めてのバイリンガル校（ポルトガル語、および日本語を使って授業を行う学校）である。バイリンガルで行われる授業は週に8時間（日本語4時間、数学2時間、理科2時間）。生徒が9年生になったときに、日本語でコミュニケーションがとれるように育てたいと考えている。バイリンガルの授業を行うにあたり、教師は年間を通して州の研修プログラムを受けている。教師のうち8名がアマゾナス連邦大学日本語学学科に在学中。



バイリンガルで行われる授業の様子

イ 日本文化の尊重

日本語の読み書きの他、自分たちで学校をきれいに整えること、静かに並んで教室移動をすることなど、日本の学校文化を参考に、指導を行っている。また、他人を尊重する精神も重んじている。日本の行事（ひなまつり、七夕など）を年間行事に組み込む年もある。

(2) 州立アウタイル校（訪問日：平成29年11月8日）

① 基本情報

児童生徒数…約250名（6年生～9年生） 教員…15名 授業時間…午前7時～午後5時
授業料…無料 選抜条件…学校が可否を判定せず、SEDUC（教育局）が申込順で決定
授業…伯語・数学・歴史・地理・理科・英語・体育・芸術・教育方法論・宗教 週35時間（60分）授業

② 学校の特色

ア 総合的な学習の時間の設定

「教育方法論」という名称で、日本の総合的な学習に似た学習が教科として設定されている。活動内容は、調査や発表などが多い。視察時には、12月末の発表会に向け、自分たちで振り付けを考えてグループダンスの発表練習を行っていた。他にも、ゴミを減らす呼びかけをしたり、劇を考えて発表したりしたとのこと。大半

の活動は、生徒が主体となって内容を検討したり練習を進めたりする。教師は、節目で確認をして助言をする
が、基本的には生徒の意見を尊重する姿勢である。

イ 成績による進級制度

大学と同じ形式(2か月に1回)でテストを行い、60%以上の成績をとることができれば進級できる。この7
年間、落第者や退学者は1人もおらず、全員が進級することができている。なお、生徒が優秀な成績をとった
際には、教員にボーナスが出される。

(3) 私立ラ・サール校(訪問日:平成30年10月3日)

① 基本情報

児童生徒数…約2600名(保育園、基礎教育課程1年生~9年生、高校生) 教員…77名

授業料…月謝R\$1140.00~R\$1754.00(2018年)

② 学校の特色

ア 幼稚園から大学までの一貫教育

人間の成長発達を目指して教育が行われており、意図的で体系的な人間形成を目標としている。独自のカリ
キュラムにより、必要な指導を長期的な視野のもとで行っている。

イ 私立校のメリットとデメリット

校内の施設は非常によく整備されている。闘技場、音楽室、プール、サッカー場などに加え、学年に応じた
遊具が設置されていたり、パソコン室が使用できたりする。教育相談員も4歳以下に1人、5~9歳に1人、と
いったように、各発達段階において、子どもや保護者の悩みに常に対応できる体制を取っている。カリキュラ
ムは独自のものを採用して、規定で年間最低800時間のところを、年間平均1200時間の授業を行うようにして
いる。全ての教科において授業数を拡大するとともに、ロボット工学やチェスなど、特色ある学習活動も行う。
保育園から高校まで、どの段階においても月謝は一般市民にとっては高額である。そのため、ある程度の収入
が見込める家庭の子どもが生徒の大半を占め、収入が課題となり、本校へ入学できない生徒もいると思われる。

(4) 市立シャペウズィーニョ校(訪問日:平成30年11月7日)

① 基本情報

児童生徒数…約313名(1年生~5年生) 教員…13名 授業料…無料

授業…伯語・算数・歴史・地理・理科・芸術・宗教

② 学校の特色

ア 学年に応じた早期ポルトガル語習得プログラム

1~3年生を対象に、mais alfabetizacao(もっとアルファベット)プログラムに取り組んでいる。低学年の
教室にはアルファベットを使った掲示物があり、プログラムの名目通り、言語に慣れ親しむことを目的に活
動が仕組まれている。

イ 小規模校のメリットとデメリット

学校の規模が小さく一度に収容できる生徒数も少ないため、以前までは、4部制を採用して、朝、昼、夕方、
夜の4部で生徒を入れ替えていた。それが多様な家庭の需要に応えることにつながっていた。しかし、時間帯
によって希望者数に差が出るなど運営面で難しさがあり、現在では一般的な午前、午後の2部制を採用してい
る。また、本校に通う生徒のうちいくつかの家庭は、暴力、麻薬取引、差別などの問題に直面しており、様々
な面で問題を抱えている。校舎の敷地面積も狭く運動ができる場所がないため、体育が授業に組み込まれてい
ないのも、1つの課題である。

(5) 私立アマゾナス・イングリッシュ・アカデミー(訪問日:平成31年9月25日)

① 基本情報

クラス編成…1 クラス 21 名～6 名 教員…13 名 授業時間…午前 8 時～午後 4 時 8 時間授業

② 学校の特色

ア 市内唯一のインターナショナルスクール

15 年前に開校された、ケンブリッジ大学によって認定されている市内唯一のインターナショナルスクールである。ケンブリッジ大学の他に、英国の国際試験センターとしても受け入れられている。ケンブリッジのカリキュラムで行われ、基本言語は英語である。

イ 学校の体制と生徒の様子

ブラジルの学校として認可されているので、1 日 1 時間ポルトガル語の授業がある。校長はイギリス人で、教員は、アメリカ、イギリス、アイルランド、ペルー、ベネズエラと、様々な国籍の教員がおり、全員が英語を話す。様々な国籍の子どもが通っており、日本人も 2 人いる。英語の能力が高い子どもは、第 3 言語を学習する機会を与えられる。入学時に英語を話せない子もいるが、半年ほどでほとんどの生徒が話せるようになる。昔は教え込みの教育が中心だったが、現在では、課題についてみんなで考える学習を基本としており、その中で信頼や責任、問題を自分で解決していく力を育てようとしている。



ペアで取り組む課題解決学習の授業

3. 日本人学校の教育活動を再考する

(1) 外国語教育、国際理解教育の推進

ジジャウマ・バチスタ校では、日本語による授業が行われていた。それも日本語の授業だけではなく、数学や理科の授業にも適用されると聞いて大変驚いた。また、アマゾナス・イングリッシュ・アカデミーでは、基本言語を英語として、現地の生徒や海外から移住した生徒を受け入れて教育を行っていた。

そのことを参考に、日本人学校での教育も、外国語や国際理解に関する教科を中心に、一部の授業を外国語のみで行うことを考えてもよいのではないかと思う。日本の学校教育でも外国語教育が重視されるようになり、小学校 3、4 年生から外国語の授業が行われ、5、6 年生からは親しむだけでなく、覚え、活用するための授業も行われるようになった。題材、指導計画、有効性を検討し、海外という環境を生かして、他言語に日常的に慣れ親しむことができるよう特定の教育活動に取り入れることは、児童生徒の力を高めるために効果的であると考えられる。

(2) 総合的な学習の時間の工夫

州立アウトアール校の教育活動に見られるように、総合的な学習の時間で国際理解教育を取り扱う際には、現在住んでいる地域にこそ魅力的な題材があると考えられる。海外の日本人学校であるからこそ、身近な地域の課題に目を向けて、題材として取り上げていくことが有効であると感じた。

総合的な学習の時間では、国や地域の文化を知ることが 1 つのテーマになることがある。その際に、住んでいる地域に特化した課題を長期的に取り扱っていくことは、児童生徒の興味をさらに高めることにつながっていくだろう。現在マナウス日本人学校では、地域で活躍した日系の人物から地域の様子を学ぶ機会を作っているが、さらに地域の機関と連携したり、施設を見学したりする活動をもつことで、さらに詳しく、現地のことを学ぶことができる。長期的に学ぶことで、学んだことを地域に発信することも、まとめの活動としての案となり得るだろう。地域の機関から学び、学んだことをその相手に返すという、長期的で双方向に関わり合った単元計画を立てることで、児童生徒の課題意識や主体的に学ぶ態度を高めていくことができると期待される。

一方、言語や安全面での配慮など課題も多いと考えられる。それでも、地域をさらに知り、国際感覚を高める

ために、さらに地域との関係を密にしていく方法について考えていきたい。

(3) カリキュラム・マネジメントについて

ラ・サール校では、幼稚園から大学までを1つの教育課程として扱うことによって、長期的な計画のもと、カリキュラム・マネジメントを行っている。また、シャペウズィーニョ校では、特に低学年の生徒に焦点をあてて、早期からアルファベットに慣れ親しむ教育を計画している。

これらの2校の取り組みを見て、改めてカリキュラム・マネジメントの大切さを感じた。もちろん中高一貫校のような学校は日本にも存在し、それらの学校の中では長期的に指導計画の工夫改善が行われているが、本校のように小中学生が同一の校舎の中で学ぶ日本人学校においては、さらにその連携がしやすいように思う。それぞれが連携するメリットを生かしていけるように、教育計画を改めて見詰め直し、適切なカリキュラムを構築していくことが、長期的な視野で児童生徒に力を付けさせるために有効であり、必要なことであると感じた。

(4) 設備・教材・教具等について

今回訪問した5校の様子を比べると、設備や教材、教具等についての大きな違いが見られ、それによる教育の質の違いが生まれることも分かった。日本人学校においても、教育に十分な設備や教材等が揃わないことは十分に起こり得ることである。

そこで、日本人学校においては長期的な視野で必要な設備を整えることや、日本と現地、それぞれの状況を考慮し、児童生徒の実態に合わせて教材や教具を取りそろえていくことが大切であると感じた。そして、児童生徒たちのために、それらを有効に活用し、少しでも日本と差のない教育活動を行えるようにしていきたい。どの児童生徒にも力を付けられる教育活動を展開していけるよう、設備面でも努力を続けていくことが大切であると考える。

4. おわりに

この3年間、現地の教育事情を知るための研修の機会を得たことは非常に貴重な経験となった。

今回挙げた現地校の他にも、3年目には国立アマゾンズ大学を視察することができた。そこには、日本語教師を目指す学生を指導する大学教授の方の姿があり、日本語教師を目指し、日本語や指導法を獲得しようと努力する学生の姿があった。

また、3年目に担任をした1年生の国語科の学習では、ジョゼフィーナ・ジ・メーロ校の生徒と授業交流を行うこともできた。そこでは、異言語の生徒とともに「お店やさんごっこ」に取り組むことで、相手意識をもって主体的に学ぶ児童の姿や、日本の子どもと交流することを楽しみに、日本語の習得に向けて努力する現地の生徒の姿を見ることができた。

日本の教育には誇るべき部分があり、学習規律や指導法など、児童生徒を育てるためにこれまで大切にされてきた財産がある。しかし、それと同様に現地にも独自の教育があり、日本との違いを感じることができる。それらのことを理解しようとする姿勢を大切にして、これからの日本人学校、そして、日本の教育をさらに発展させるヒントを得られるよう、今後も努力を続けていきたい。